

股間に仲よく顔をうずめている美しい母と娘の姿を見つめた。夫人と詩織の艶やかな髪が波打って踊っている。顔を上下させて舌を使う母娘の姿に卓也はさらに肉棒を固くするのだ。

卓也は、詩織の髪をつかんで軽く押さえた。詩織はその意図を感じ取ったようだ。先端を舌先で舐めていた行為をやめ、その可愛い口で卓也のものを深く含みだした。少女の口に、卓也の怒張は大きく、それでも喉深く呑みこんでいく。舌の使い方はまだ稚拙である。しかし、美少女のまだ慣れない初々しいフェラに卓也は満悦している。同時に、夕子夫人は卓也の睾丸の袋にまで口を這わせているものだから、たまらない刺激である。母と娘が口で奉仕し、舌を使って股間のものを一心に愛撫しているのだ。母娘で顔を寄せ合って、フェラチオを強制されている夫人と詩織の心情を思うと、加虐感が高まり今にも射精してしまいそうである。

「ふふふふ、奥様もお嬢様もなんて恥知らずなお姿でしょうか。母親と娘がこうやって一緒に並んでフェラチオをなさるなんて、恥ずかしいことをございますわね。その心中をお察ししますわ。何もかも忘れて卓也さんのたくましいものにご奉仕なさいまし」  
雅代の鞭が、夫人と詩織の臀部に交互に厳しく当てられる。

びしっ！

びしっ！

夫人と詩織の弱々しい悲鳴が卓也の股間から漏れるが、男根を含んだ詩織はくぐもった悲鳴であり、夫人の悲鳴はどこか甘く鞭を請うようなものになってきているのだ。

卓也が夫人のウェーブした艶やかな髪をつかんだ。そのまま自分の勃起に顔を寄せさせる。

「詩織さん、交代しましょ」

夫人は口いっぱいを含んでいる詩織の耳に口を寄せた。詩織が肉棒を吐き出した。それは詩織の唾液で表面がぬるぬるになっている。その肉棒に、夫人が上品な唇を開け、一気に含んでいく。含んでは、浅く吐き出し、また深く含み、口腔粘膜で卓也を愛撫するのだ。舌使いは詩織とは比べ物にならない。絡みつくような舌の使い方に卓也が思わず呻く。

「これはいいですな・・・奥様のフェラは実に気持ちいい。奥様のフ

ェラのテクニックは天性の才能ですな。」

卓也は呻いた。夕子は舌で肉棒の裏側を愛撫しながら喉の奥にまで男根を誘うのだ。

「お嬢様、お口がお休みになっていますわ。奥様がさっきおやりになっていたように、卓也さんの睾丸の袋を口で愛撫するのですよ」

雅代が、詩織の背中に鞭を当てた。

詩織は、卓也の陰囊（いんのう）に口を這わせる。

卓也は、交互に夫人と娘の口に男根を含ませた。ねっとりとした母と娘の唾液が卓也の男根から糸を引いて垂れている。

「そろそろ、男性の味を教えてくださいあげましょう」

卓也が詩織の髪をつかんだ。そのまま詩織の頭を前後させる。

「詩織さん、がんばるのよ」

激しく顔を前後にゆすられる詩織を気遣って夫人は心配そうに声をかけた。

「奥様、油を売っていてはだめです！」

雅代が叱る。鞭がとぶ。夕子は、卓也の股間に顔をうずめた。

「では、そろそろ飲んでいただきますよ」

卓也の腰がぐいっとつきあがり、詩織の口腔でびくっとはねる。次の瞬間、一気にはじけた。熱い樹液がどっと放たれ、詩織の喉に浴びせかけられる。美少女の口腔にどろっとした粘性の樹液が広がっていく。

そのとたんに、詩織が激しく咳き込んだ。気管支に卓也の精液が入り込んだのだ。

「あら、行儀の悪いお嬢様なこと。せっかくの卓也さんのものをこぼしてしまって、いけない子ですわね。それにお母様のお顔も汚してしまって・・・」

雅代が、詩織の臀部を鞭打った。詩織は咳き込み、卓也の肉棒を口から出してしまったのだ。射精の途中であった肉棒はその先端から白い樹液を放出しており、それが夕子夫人の顔やら髪やらに吹きかけられた格好になった。夫人のこめかみから頬にかけて、精液が垂れて惨めな姿になっている。